

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

生徒会活動の実践と育つ力

著者	小澤 洋祐, 上岡 学
著者 (英)	Ozawa Yosuke, Ueoka Manabu
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	7
ページ	19-29
発行年	2019-10-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001277/

生徒会活動の実践と育つ力

Student Council Activities and their Growth Potential

小 澤 洋 祐^{*}
OZAWA Yosuke[†]
上 岡 学
UEOKA Manabu

はじめに

筆者が勤務する女子校において、生徒会活動が生徒主体ではなく、教員主導のもと生徒が指示を待って動いていく状態になってしまっていた。また、生徒会選挙に向けての公約に関しても、学校全体をよくするものという考えではなく、現状のルールに対する批判や、それを変えていくために工夫するというような生徒の欲求が前面に出る状況になっていたことも問題と考えていた。

その状況を改善し、生徒自身が主体的に生徒会活動に関わるための取り組みを考え、その結果生徒にどのような力がついたのか、自己評価と他者評価を通して確認していきたい。

1. 活動の経緯

生徒会総務は生徒総会を始め、新入生に向けたオリエンテーションや各種行事における運営主体となっている。しかし実際のところは、会計関連の確認で仕事をするものの、その他行事等に関する原稿は教員が作った基本路線に穴埋めをして読むだけになってしまっていた。

教員が主導して生徒会活動の運営を行うことになってしまっていた経緯として、仕事を早く終わらせるという視点があったと考えられる。生徒主導で動かす際に、待つことが必要であるが、任せ方によっては全く進まない場合もある。そこで教員自らやるべきことの大筋をやってしまい、残ったところを生徒に少しだけやらせていくということが始まったのではないかと考えられる。実際私が生徒会を引き継いだ初年度は、基本的に教員の指示がなければ動けず、集まる日もまちまちという状況にあった。

このような状況を改め、生徒が主体的に動き、考えることができる生徒会となれるように改善策を考えた。

^{*} 藤村女子中学・高等学校 [†] 武蔵野大学

2. 概要と改善策

(1) 概要

生徒会が主体的に動いていけるようにしていくため、まずは生徒たち自身に自分たちの学校をどう良くしていくかという問題発見を行わせた。生徒会にアンケートを取って改善すべきことを自分たちの問題として捉えさせ、改善する方法を話し合い、行動していくという流れを作ることにした。その後、実際に行動をしていった結果を自分たちで評価すると同時に、生徒会の行動を見ていた周囲の人々からも評価をしてもらい、そこに教員の評価を加えた三者による評価を行うことで真の意味で生徒が獲得した力を見つけることができると考えた。

(2) 生徒会アンケートの実施

生徒会活動の改善を決めてから、まず生徒に行ったのは生徒会全体で学校のためにできることは何かという、根底の部分を共有するためのアンケートである。

内容としては以下のように項目を並べ、高校生徒会総務 11 名を対象に自由に記述をさせた。

1. 生徒会としてやりたいこと
2. 今の学校の良いところ、悪いところ
3. 学校をよりよくするために必要なこと
4. そのために自分たちにできること、やるべきこと

これらの項目を通して生徒に自分たちの現状を把握させることや、ルールに対する不満ではなく学校全体をどのように見ていくべきなのかを考えさせることを目的とした。

生徒からは公約の実現という目標を書いている者だけでなく、地域へのボランティア活動推進や通学時のマナーなどの意見も出てきており、生徒たち自身がやりたいと思っていることを文面化することで本人たちに対する意識付けのきっかけになったと考えている

(3) 改善策

アンケートを読んだうえで、生徒も自ら動いていきたいと考えていることを感じた。同時にこれからの学校をより良くしていきたいという意欲も、話し合いの中で聞くことができた。そのため、具体的にどのようなアプローチをして改善していくかを考え、改善策を 6 点挙げて実行させていくことにした。

① 生徒会活動の習慣化（固定化）

生徒会が固定日に集まるという習慣がなかったため、まず集まる日を固定する。

② 生徒主体で話し合う内容を作成し、議題を全員で共有する。

生徒が輪番で話し合いの期日までにレジュメを作成し、話し合う内容をそれぞれが共有する。

③ 委員会活動の活性化

生徒会がほかの委員会と連携、協力を行うことができる組織であると自覚させると同時に、各

委員会自体がより自主的に動くことができるような働きかけを行う。

④生徒会が主体として発信する機会を増やす。

生徒会の考えや行動をお互いに話し合うと同時に、学校全体へ発信する機会を作る。

⑤地域の実情、世界の実情などを理解し、ボランティア活動への門戸を広げる。

以前から地域貢献として、地域清掃活動への参加や募金活動への協力などを行っていたが、正解のない問いに対して自分たちがどう行動するかを考える契機としてボランティア活動を推奨する。

⑥学校をよくするために取り組めることを考える。

アンケート等を活用し、生徒会として学校のためにどのようなことをして、どうすれば学校をより良い環境にすることができるのかを考え、実行する。

以上の事柄を教員側が意識的に働きかけ、生徒会主導で動くための改善策として考えた。これらを踏まえ、実践内容を次にまとめていく。

3. 改善策をふまえた実践（6つの実践）

（1）実践1（生徒会活動時間の固定化とレジュメ作成）

まず行ったのは生徒会定例会の固定化である。以前まではある程度固定（水曜日昼に集まる）ということは決まっていたが、用事がなければ集まらないこともあるような状況であった。本校の場合は生徒会活動の傍ら部活動も行っている生徒が全員であり、昼休みの限られた時間内で話し合うという習慣が長く続いていた。

最初に意識を変えていくため、毎週水曜日に固定して集まることを生徒に提案し、話し合う内容については生徒が交代しながらレジュメづくりをしていくように促した。これは生徒会全体が話し合う内容を常に把握し、進行していけるようにする配慮であったが、生徒自身は全体が2週目に入ったころには慣れ始め、自主的に作成していく傾向が見られた。

（2）実践2（中央委員会と各委員会との連携）

本校では生徒会総務、各種委員会の委員長、クラブ代表者が集まる場として中央委員会があるが、原則月一回というルールが機能しておらず、それまで行うことがほとんどない状況になっていた。そのため、生徒会公約実施に関する意見集約や、生徒総会へ向けて各箇所で開催となっている意見の集約のために中央委員会を実施した。

意見の活発な交換という段階にはいたらなかったものの、現状の問題を全体で把握することはできた。今後は学校全体を通して生徒に対する働きかけを進めていく必要がある。

また、登下校時の通学路のマナーに関しても苦情等が出ていたことを生徒会にも伝えたとこ、生徒会と生活委員会が連携して朝の登下校路の状況把握と注意喚起を行うことを決めた。こちらは生徒会が状況把握で立った後、生活委員会に立つ場所を指示し、一緒に朝の時間（7:50～8:15まで）で立つことにした。自主的に何ができるかを考えて活動した結果である。

(3) 実践3 (文化祭に向けた活動)

文化祭については、生徒会がこれまで全体の統括という役割を担っていたものの、文化祭実行委員会を各クラスから出すようにしてからは当日の見回りなどのサポート的役割になっていった。そのため、今年度は生徒会から各団体に向けて生徒会目標を設定し、その実現に向けた企画書の提出をしてもらうよう働きかけを行った。その内容に関しては、「持続可能な開発目標」を提示し、その内容から生徒会が選んでから全体に説明するという流れを作ることにした。今年度は「つくる責任、つかう責任」という内容がいいということで、作成するもののリサイクルやごみに関する問題などに関しても言及しながら生徒会目標を作成し、企画段階からその内容を盛り込んだ企画書を各団体に作らせるようになった。

(4) 実践4 (藤村BPプロジェクト)

前生徒会長で大学に進学した卒業生が、所属するボランティアサークル「ボルネオプロジェクト」への協力をしてもらえないかということで、学校を訪ねてきた。話を聞いたうえで、その計画の協力を生徒会が行うことにした。

今回はこの活動をしている生徒が前生徒会長であったことも大きいですが、生徒会に内容を伝えたとところ積極的に協力したいという申し出があったため、正式に生徒会の活動として取り入れることを決定した。

最初に教員に話があった内容としては、ボルネオ島にいる不法移民の子供たちに対し、物資支援のための文房具を学校内で協力してもらって集められないかということだった。しかし、生徒会にとってこれを学びの機会にするために、ただ手伝うということではなく目的意識を共有して行うことができないかと考え、手伝うにあたってお願いしたいことを教員側から大学生に伝え、プロジェクトを進めることにした。

内容としては、次の3点である。

- ①生徒会が直接活動する学生から話を聞かせてもらいたいということ。
- ②その話を聞く場で、可能であれば生徒からの意見やアイディアを採用してほしいということ。
- ③活動が終わった後の振り返り（活動した結果のまとめ）を必ず行わせてほしいということ。

この3点をふまえて、一緒に協力して進めることができるように連携した。

その後、大学に直接話を聞きに行った際に、グループワークを通して現状の理解と意見の提案を行い、結果的に生徒たちの意見を取り入れた物品の収集と、英語による仕事図鑑の作成を行うことになった。

これらを生徒会が各クラスを回って説明し、協力依頼をして物品を集めることとなった。集約は7月中旬を予定し、8月に渡航するボルネオプロジェクトのメンバーに渡して持ってってもらう予定を組んでいる。振り返りに関してはその渡航後に行うことで、自分たちの行動がどのような結果に結びついたかを確認していきたい。

（5）実践 5（ボランティアセンターの課題解決のための取り組み）

生徒会の地域協力の一環として、ボランティアセンター武蔵野との連携を行い、そこでの問題に対して解決する方法を考えさせた。課題に関しては生徒会がボランティアセンターを訪ね、そこでの問題を教えてもらう場を設定して話を聞いた。

そこではボランティアセンターの認知度の低さ、地域における若い力の欠如などの問題がわかり、生徒達はまずボランティアセンターを認知してもらうための働きかけをすることを決めた。

（6）実践 6（スマートフォン使用のルール作りに関するワークショップ）

これは東京都ファミリールールに依頼し、高校生徒会 11 名対象のワークショップを放課後行った。現行のルールの改善点や新しいルール、そのルールを守らせるための方法を学び、その後生徒達だけで話し合いを進めた。

結果、生徒会が素案を作ったルールを中央委員会で生徒全体に提示し、各クラスルーム長に意見を集約してもらったうえで再度検討するという方法をとることになった。生徒達自身も全体を動かすためにどうすればいいかを考える契機となり、学校内のルールに関する理解を深めると同時に、生徒全体へ周知させる機会となった。

4. 評価アンケートと分析による改善策によって育つ力

（1）評価アンケートの実施と結果

①どのようなアンケートを行ったか

今年度途中に、生徒にアンケートを取って、生徒自身がどのような力を得たと感じられたかをまとめる。今回は学習指導要領における特別活動の内容に沿った形で生徒にどのような力がつuitたのかという観点を元に、以下の内容のアンケートを取った。

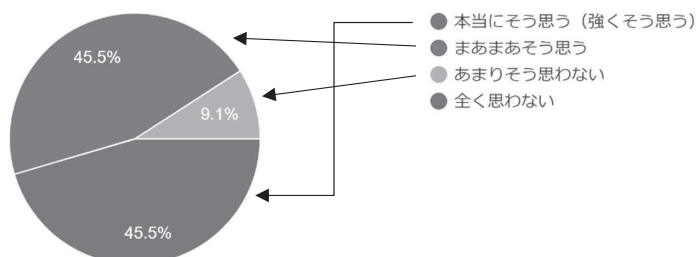
- A. 生徒会活動に自分の意見は反映されていると感じる
- B. 生徒会の活動は自分たちで進められていると感じる
- C. 生徒会の活動を通して、学校外の人たちとのつながりが増えたと感じる
- D. 生徒会の活動を通して、自分たちで学校生活をよくしているという実感がある
- E. 生徒会の活動では、自分たちでルール作りを行うことができていると感じる
- F. 生徒会の活動に充実感がある
- G. 生徒会の活動を通して、自分自身成長したことがあると感じる（あればその内容）

②結果及び分析

高校生徒会 11 名に対するアンケート結果は以下のとおりである。

A. 生徒会活動に自分の意見は反映されていると感じる。

11 件の回答

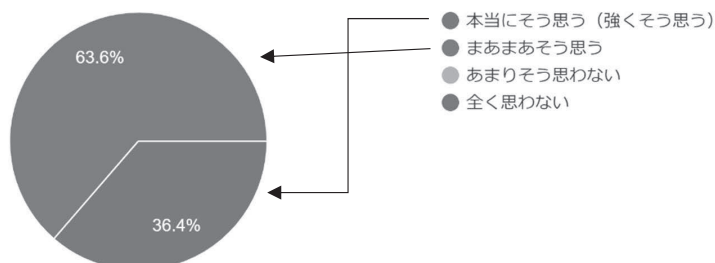


A. 生徒会活動に自分の意見は反映されていると感じる

- ・話し合いの頻度と時間を固定し、進行は生徒が基本的に行うこととした。10 名が自分たちの意見が反映されて活動できていると答えているところから、概ね生徒のみの話し合いでも意見を尊重しながら進められていると考えられる。教員も同じ場所にいるが、初期に比べれば学年の隔たりなくお互いに意見を言っていると感じられる場面が多くなった。

B. 生徒会の活動は自分たちで進められていると感じる。

11 件の回答

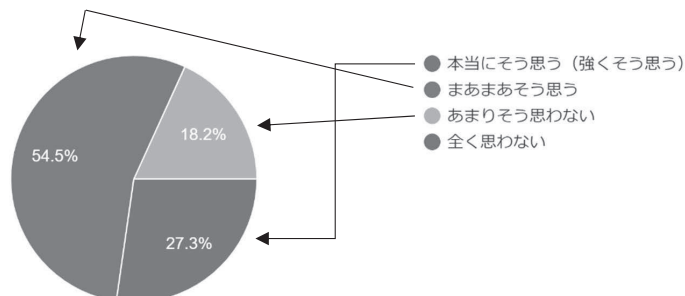


B. 生徒会の活動は自分たちで進められていると感じる

- ・全員が自分たちで活動を進めていると感じており、こちらに関しては生徒達が話し合いを進め、意思決定をし、それを全体に提示する流れができているからであると考えられる。

C. 生徒会の活動を通して、学校外の人たちとのつながりが増えたと感じる。

11 件の回答

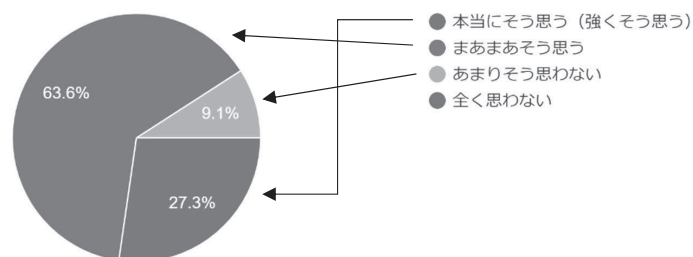


C. 生徒会の活動を通して、学校外の人たちとのつながりが増えたと感じる

- ・意識的に外部のボランティア活動に参加する機会を増やした結果、9名の生徒はつながりが増えたことを感じている。あしなが学生募金への協力やボランティアセンター、大学のボランティアサークルなどと連携する際に、相手の方に一度来てもらい（もしくは伺い）意図を生徒達が理解してから実行し、振り返るという流れを全てにおいて行っている結果であると考えられる。

D. 生徒会の活動を通して、自分たちで...活をよくしているという実感がある。

11 件の回答

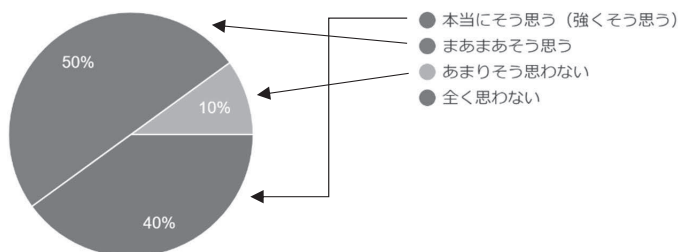


D. 生徒会の活動を通して、自分たちで学校生活をよくしているという実感がある

- ・学校生活への影響を実感できているかが課題であると考えていたが、実際のところほとんどの生徒が自分たちで良くしている実感を持って活動してくれていることがわかった。これは朝の時間帯に学校周辺に立つことや、委員会との連携を意識的に行うことができていることに影響があると考えられる。

E. 生徒会の活動では、自分たちでルー...りを行うことができていると感じる。

10 件の回答

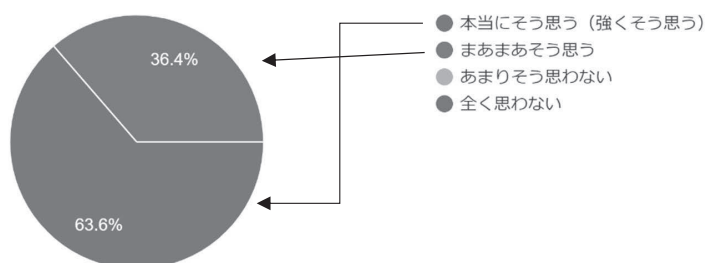


E. 生徒会の活動では、自分たちでルール作りを行うことができていると感じる

- ・ 学校生活のルールは校則が基本にあるが、その内容を見直し、必要なことを提案するという意識が話し合いの中でできてきていると考えられる。生徒会が公約としていた内容を校長先生と直接話をして聞いてもらうという場を持ち、その後直すべきことを考えている最中であるということもこの結果の要因であるのではないだろうか。

F. 生徒会の活動に充実感がある。

11 件の回答

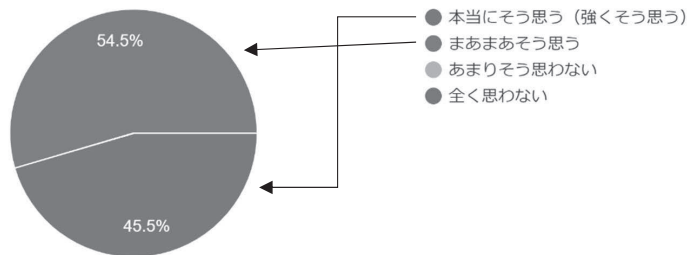


F. 生徒会の活動に充実感がある

- ・ これまでのように生徒会に対し、今までの生徒会ではあまりやっていなかったことを提示しながら進めた結果として、すべての生徒が強い充実感を感じていることがわかった。こちらに関しては、生徒にも今年度の生徒会は歴史を変えるスタート地点であるということを行いながら進めていたことも影響していると思うが、忙しさを感じながらも充実をしている様子がわかる。生徒会役員として意識をもって生徒会に入っている生徒が多くいることを加味しても、この結果は前向きにとらえられると考えている。

G.生徒会の活動を通して、自分自身成長したことがあると感じる。

11 件の回答



どのような成長を感じられましたか。11 件の回答

私は募金活動をした時にあしなが募金のおかげで色々な人が助かって、色々な人がチラシを受け取っては募金をして下さってお互いに支え合っていることを学びました。また機会があれば参加したいです。

自分の意見を言うこと

人の意見を聞いてそれを自分の意見と合わせて話を進められるようになった。

朝集まることが多かったので、時間に余裕を持って登校することができるようになった！

自ら自発的に行動すること

ディスカッションをするときの意見を言う場面で、前よりも意見を言うことができるようになった

自分から意見を出して実行したりする事や、初対面の人とでも話せるようになった。

自分の意見を発言できるようになった。

意見を言うようになった

自分から率先して発言するようになったと思う。

人前で話すことはもちろん、責任感や組織の動かし方など多くを学べた。

G. 生徒会の活動を通して、自分自身成長したことがあると感じる（あればその内容）

- ・生徒たち自身が成長できていることがあるという実感があれば、記述してもらおうという内容であったが、こちらに関しても全員が成長を感じていた。主に話し合いの場における意見発信や、会議などの進行に関する部分で成長を感じている生徒が多くいる。生徒に話し合わせるということを意図的に仕掛けるだけで、多くの生徒が実感として成長を感じていることがわかる。また、他団体と協力した結果として募金活動の意図をくみ取ることができている生徒が出ていることも良い結果であると考えられる。

(2) 育つ力

このような結果を踏まえ、生徒に育つ力を3点にまとめていく。

①主体的に意見を発信する力

生徒会は学年を縦断して話し合う場であり、授業内でのグループワークとも少し違った働きがあると考えられる。生徒の実感として自分の意見を言えるよう成長したということは大きな参考となる。また、教員としても話し合いをしながら意見を言わない生徒がほとんどいない状況が見て取れた。意見を伝え、それが反映されていく過程を経験することにより、自分たちで学校をよくする、変えていけるという実感を持つことができるよう促すことが、この力を育てる要因になるのではないだろうか。

②自主的に率先して行動する力

レジュメづくりに関しては、自分たちで話し合いに向けた行動を起こすことが自然になってきた。また、前述した意見の発信の結果、それを実現するために行動するという流れが自然に生まれていることもこのような力が育つ要因であると考えられる。これらは話し合いを通して実行に向けた活動を行うということだけではなく、ボランティア活動を強い気持ちをもって行っている人たちとの交流を通じて身に付けられる力でもあると考えている。特にBPプロジェクト際には校内の各教室へ説明に行くことまで自主的に提案し、終礼時に各教室に回るという行動までできたことも大きい。活動を始めた責任感が自主的に動くという気持ちを作ったと考えられる。この活動からは、ボランティアを通じた社会参画につながる力の獲得も期待できるのではないだろうか。

③組織として動き、集団としてより良い環境を作る力

生徒会という組織がまとまって活動し、話し合いを進めていくことによって意見発信、行動することができるようになると、その力はより良い学校づくりのために動いていくことになる。今回の実践を通して、生徒が自分で学校を良くしている実感や充実感を得た活動ができていることが分かった。生徒会がそのような意識をもって学校の中心にいて、より良い環境づくりをするための発信を生徒一人ひとりに期待することができるようになるのではないだろうか。

今回の実践ではまだそこまで至るほどの成果は出ていないが、この流れをきっかけに、学校全体をよくすることを生徒自身が一人ひとり考えられるようになることも期待できると考えている。

5. 課題

これら生徒会活動において育つ力をふまえ、現状の課題についてまとめる。

(1) 主体的発信の先にある教員との連携

生徒達は短い時間の中で話し合いを進め、できる限り自分たちで学校生活における発信をしていくようになっている。今後は生徒会自体がこのような進め方をしていることを教員全体で把握

し、連携を強めていく必要性がある。

（２）評価の方法

今回は生徒アンケートにより自ら獲得できた力を把握しているが、外部団体等他者からの評価を得たうえで把握するということができなかった。今後教員の評価基準としてはループリックを作成するなど、生徒が獲得できたと自覚した意見を元にしながら客観的に判断できる材料を作っていく必要があると感じている。

（３）生徒会活動の充実感をどのような活動を通して感じさせるか

昨年度から少しずつ、今年度から本格的に動き始めた生徒会の活動ではあるが、生徒達が外部とのつながりを持つことや、どの活動の中でどのように生徒を育てていくのかということを体系的に整理し、内容の骨子を組み立てる必要性があると感じる。

6. 終わりに

今回は生徒自身が活動を通してどのような力を育むことができるかを、いくつかの実践を通して検証をした。生徒会の活動が教員主体となってしまうことや、お手伝いに終始してしまうことが今まで多くあったことをふまえ、生徒自身に活動させることに重点を置いた。生徒自身は目の前の活動にしっかり取り組んでおり、それ自体が充実した活動になっていると感じていることがわかったことも大きな収穫となった。今後は今回見えた課題を元に、生徒の成長にさらに寄与できる活動を研究していきたい。

参考文献

1. 文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領』
2. 文部科学省（2010）『生徒指導提要』
3. 工藤勇一（2018）『学校の「当たり前」をやめた。——生徒も教師も変わる！ 公立名門中学校長の改革』（時事通信社）
4. 宮下与兵衛，栗又衛，波岡知朗（2014）『地域を変える高校生たち——市民とのフォーラムからボランティア，まちづくりへ』（かがわ出版）